

■ 編集だより

編集後記

日本の自殺者が急増して3万人台を越えたのが平成10年であるが、以後その数は3万人台に張り付いて今年で10年目をむかえる。年代別の自殺者の内訳を世界の国々と比較した場合、わが国では特に働き盛りの40～60歳代の男性を中心に増加していることが特徴的である。普通この年代の自殺率は最低になるといわれており、自殺による経済的な損失はもとより社会的な損失は深刻である。未熟な青年でも疲れた老人でもなく人生の中で最も安定した充実すべき年代に自殺者が多いという点に社会の病理性を感じる。とりあえず厚生労働省は自殺予防キャンペーンやうつ病の早期発見と治療の効率化を図るなどの対策が提案されているが、なかなか減少に転じる様子は無い。増加の原因については様々な推測がなされ、多重債務問題や企業の雇用関係の変化などが指摘されているが、もっと本質的な社会心理の変動が進行しているように思える。自殺率の変化が社会構造の変化に連動していることは、社会主義崩壊後のロシア・東欧諸国の自殺率の高さをみれば明らかである。戦争状態になると逆に自殺率が低下するといわれているが、わが国でも自殺率が最低になったのは昭和20年の終戦直前であった。また、神戸では阪神淡路大震災の翌年に自殺率が低下したとの報告もある。見方を変えれば自殺の増加は現代日本が平和である証左と言えなくも無い。わが国では自殺と宗教との関連について言及されることは少ないが、宗教的情操が濃い地域ほど自殺率が低いことは良く知られた事実である。すなわちカトリック圏はプロテスタント圏より自殺率は低く、イスラム教圏は更に少ない。もともとこれらの地域に比べて日本では伝統的に自殺を容認するような傾向があるといわれるが、各宗教の自殺に対する評価は別として、宗教を介したコミュニティの連帯感が自殺を防止する上で重要な役割をはたしているのかもしれない。あなたの宗教は何ですかと聞かれて、ほとんどの日本人は無宗教だと答える。宗教といえば、教会があって、聖典があって、定期的に宗教活動をおこなうものと考えれば日本人は殆どが無宗教といえるが、形骸化しているとはいえ葬式の大部分が仏式で行われ、正月には多くの人が神社に足を運ぶ。キリスト教やイスラム教などの一神教と違い、日本の宗教は生活全般に薄く広がっている社会規範のようなものである。戦後の教育は科学的であることが推奨され、宗教は迷信とか古い体制の残滓として否定されるまま60年がすぎた。この間、社会を覆っていた宗教的情操が次第に薄くなり、ある臨界を超えて今日の自殺の増加の一因になったのではないだろうか。「千の風に乗って」がもてはやされるのも忘れられた靈性に対する日本人の郷愁のように思える。

山田茂人